

日本語の複合動詞における後項動詞とロシア語の動詞接頭辞との意味的対応について

—— 語彙的複合動詞を構成する「～でる」「～だす」の場合 ——

アブラギモヴィチ・ユーリヤ

京都大学大学院 人間・環境学研究科 共生人間学専攻

〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

要旨 本稿では、日本語の語彙的複合動詞を構成する後項動詞のうち「～でる」「～だす」に焦点を当て、これらを用いて構成された複合動詞をロシア語に訳す際に使用されうる接頭辞付加動詞について統計的調査を行う。この調査結果から、「～でる」「～だす」に意味的に相当するロシア語の主な動詞接頭辞を特定し、日本語学における後項動詞の意味に関する先行研究とロシア語学における動詞接頭辞についての先行研究を手がかりに、「～でる」「～だす」と一部の動詞接頭辞との間に意味的な相関性があることを明らかにする。

はじめに

日本語を学ぶ外国人にとって習得が難しいもののひとつに複合動詞がある。筆者の個人的な経験から言えば、日本語の単純動詞（本動詞）の意味は理解できたとしても、それに種々の後項動詞が付されて形成された複合動詞では、その全体的な意味や細かなニュアンスをとらえにくい場合がある。また、外国語で書かれた日本語文法の教科書や文法書では複合動詞に関して詳しい説明がなされておらず、外国人が日本語を学習する中で複合動詞の習得を容易にする手立てがないという現状がある¹⁾。

こうした問題があることから、印欧語の動詞接頭辞と日本語の複合動詞後項が同種の現象であるとみなされていても²⁾、印欧語話者にとって複合動詞の習得が容易であると必ずしも言えない。

本稿では、上記のような日本語学習に関する問題を出発点とし、複合動詞における後項動詞と、筆者の母語であるロシア語の動詞接頭辞との対応を意味的な観点から考察し、両者の意味における共通点を見出すことによって、ロシア語ネイティブが日本語の複合動詞を学習する際に教育的効果

が高められるような一種の手引きを作成することを第一の目標とする。

なお本稿では、いわゆる「語彙的複合動詞」を構成する後項動詞のうち、「～でる」および「～だす」を研究対象とする。複合動詞のデータについては国立国語研究所によるオンライン検索システム『複合動詞レキシコン』およびその元データの中に収録されているものを使用した³⁾。

1. ロシア語の接頭辞付加動詞と動詞接頭辞

接頭辞付加動詞 (prefiksál'nyye glagoly あるいは prefiksál'nye glagoly⁴⁾) とは基幹動詞⁵⁾に接頭辞を付したものである。例えば、動詞 *vpisat'* (不定詞)「書き込む、書き入れる」は基幹動詞 *pisat'*「書く」と動詞接頭辞 *v-*から形成されている。この例を見て分かるように、接頭辞と結合することによって元の基幹動詞に補足的な意味が与えられ、特定化された意味を持つ新たな動詞が生まれる。

筆者が複数のロシア語詳解事典にあたって調べた限りでは、ロシア語における動詞接頭辞の数は27種類に及ぶ⁶⁾。接頭辞と基幹動詞が結合するパターンは決まっており、全ての基幹動詞に27種類全ての接頭辞が付されるのではない。上記の動

詞 *pisat'* を例に挙げると、この動詞に付される接頭辞は 19 種類に限られる。*pisat'* 以外の基幹動詞では、例えば *pit'* 「飲む」と *dumat'* 「考える」は 10 種類の接頭辞と、*žit'* 「生きる」と *stojat'* 「立つ」は 9 種類の接頭辞と結合して接頭辞付加動詞となる。このように結合可能な接頭辞の数は動詞によって異なる。例として *pisat'* に基づいて形成された接頭辞付加動詞を羅列すると以下のものが挙げられる。

例. *vpisat'* 「書き込む」, *vypisat'* 「書き抜く」, *dopisat'* 「書き上げる」, *zapisat'* 「書き留める」, *ispisat'* 「書き尽くす」, *napisat'* 「書く」, *nadpisat'* 「表書きする」, *nedopisat'* 「書き残す」, *opisat'* 「描写する」, *otpisat'* 「書き終わる」, *perepisat'* 「書き直す」, *popisat'* 「しばらく書き物をする」, *podpisat'* 「署名する」, *predpisat'* 「指示する」, *pripisat'* 「書き足す」, *propisat'* 「処方する」, *raspisat'* 「書き分ける」, *spisat'* 「書き写す」, *upisat'* 「書ききる」

動詞接頭辞の中には *napisat'* の *na-* のように、固有の語彙的ないし物質的意味を持たず、単に完了体であることを示すマーカーとして使用されるものがある⁷⁾。つまり、この種の接頭辞を持つ完了体動詞は、派生元となった不完了体の基幹動詞と同一の動作を表す。こうした動詞接頭辞は空の接頭辞 (*pustoj prefiks*) または純アスペクト的接頭辞 (*čistovidovaja pristavka*) と呼ばれる⁸⁾。また、完了体となった接頭辞付加動詞へさらに接尾辞を付すことによって二次的な不完了体の形が形成される場合もある⁹⁾。

なお、ロシア語には動詞の他に、名詞や形容詞に付される接頭辞のカテゴリーも存在するが、本稿では動詞接頭辞のみを扱うこととする。

2. 日本語の複合動詞に関する先行研究

2.1. 語彙的複合動詞と統語的複合動詞

長嶋 (1976)¹⁰⁾ によれば、日本語の複合動詞には「名詞+動詞」、「形容詞 (形容動詞)+動詞」、「副詞+動詞」、「接頭辞+動詞」、「動詞+動詞」などの構成を持つものがある。このうち、本稿で

検討の対象とするのは動詞+動詞型の複合動詞である。

動詞+動詞型の複合動詞は前項動詞 (V1) と後項動詞 (V2) から構成され、「追い/払う」、「洗い/流す」のように前項動詞が連用形である場合と、「歌って/みる」、「残して/おく」のように前項動詞がいわゆる「テ形」である場合の 2 つのタイプが存在する。このうち、動詞連用形+動詞タイプの複合動詞を収集、収録することに特化したデータベースとして『複合動詞レキシコン』がウェブ上に公開されている。これは国立国語研究所が提供するオンラインの複合動詞検索システムであり、誰でも自由に閲覧できる点、そして動詞連用形+動詞型の複合動詞が網羅的に収録されているという点で非常に画期的な試みである¹¹⁾。

『複合動詞レキシコン』に収録されている複合動詞はいわゆる「語彙的複合動詞」である。この種の複合動詞の区別は影山 (1993) が提唱したものであり、『複合動詞レキシコン』には影山の理論が反映されている¹²⁾。本稿における複合動詞の収集および分析はこの『複合動詞レキシコン』を使用して行ったため、本章ではまず影山の複合動詞に関する研究を紹介する。

影山 (1993) はまず動詞+動詞型の複合動詞を「統語的複合動詞」と「語彙的複合動詞」に分類している。「統語的複合動詞」は意味上の限定を持たない複合動詞である。例えば、「～始める」「～続ける」「～終わる」などの後項動詞と結合した複合動詞「飲み始める」「飲み続ける」「飲み終わる」では、酒類だけではなくあらゆるものが前項動詞「飲む」の対象となりうる。さらに、統語的複合動詞を構成する一連の後項動詞は「飲み歩き始める」「飲み歩き続ける」のように、語彙的複合動詞と結合することもできる¹³⁾。

さらに影山は、統語的複合動詞を構成する後項動詞を「始動」「継続」「完了」「未遂」「過剰行為」「再試行」「習慣」「相互行為」「可能」という 9 つのグループに分類している¹⁴⁾。これらの意味を持つ後項動詞によって構成された統語的複合動詞をロシア語に訳す場合、訳し方のパターンはある程度決まっていると言える。例えば、「始動」を表す後項動詞が用いられている場合、複合動詞

のロシア語訳には補助動詞の意味を持つ *načat'* / *načinat'* と不完了体動詞の不定形を用いた合成述語が用いられる (例, *načat' rabotat'* 「働き始める」, *načat' prygat'* 「跳び始める」). この他, 動詞接頭辞 *PO-*, *RAZ-*, *VZ-*, *ZA-* などを持つ接頭辞付加動詞によって始動の意味が表されることもある (例, *zastučat'* 「打ち始める」, *pobežat'* 「駆け出す」, *zapet'* 「歌い出す」)¹⁵⁾. また, 「完了」の意味の統語的複合動詞のロシア語訳には, 補助動詞の意味を持つ *končit'*, *zakončit'* を用いた合成述語や, 動詞接頭辞 *OT-* を用いた接頭辞付加動詞が用いられる (*zakončit' pisat'* 「書き終わる」, *otbegat'* 「走り通す」, *otpet'* 「歌い尽くす」)¹⁶⁾. このように, 統語的複合動詞では前項動詞の語彙特性が後項動詞による影響をまったくあるいはほとんど受けないため¹⁷⁾, 外国語への翻訳における訳出パターンを固定化することが容易である.

これに対し「語彙的複合動詞」とは, 2つの単純動詞が結合して複合動詞となる際に, 前項動詞の意味が後項動詞の性質によって限定されるものを指す. 例えば, 複合動詞「飲み歩く」, 「飲み明かす」, 「飲み交わす」, 「飲み倒す」, 「飲み潰れる」では, それぞれの後項動詞との結合によって, 前項動詞「飲む」の対象が酒類に限定されている¹⁸⁾.

語彙的複合動詞では前項動詞と後項動詞の意味的な関係性が非常に複雑であり, これに関しては統一の見解と呼べるものがまだ存在していないと言える. 筆者のような, 第二言語として日本語を学習する者が語彙的複合動詞の意味的な構造を理解しようとする時, 統語的複合動詞よりも難解であるという印象を持ってしまうことは上記のことが関係していると思われる.

そこで本稿では, 語彙的複合動詞の訳語として使用されうるロシア語動詞を分析し, その中でどのような動詞接頭辞が用いられる傾向にあるのかを明らかにすることで, ロシア語を母語とする日本語学習者が語彙的複合動詞の意味を理解する際の手引きを作成することを最大の目的とする.

本稿で調査対象とした日本語の後項動詞は「～でる」「～だす」である. 『複合動詞レキシコン』の元データによれば, 語彙的複合動詞を構成する

後項動詞のうち, 生産性の高さに着目すると「～こむ」(253語), 「～あげる」(156語), 「～だす」(147語), 「～かえる」(122語) などがある. これらのうち, 後項動詞「～こむ」とロシア語の接頭辞付加動詞との意味的な関係についてはアブラギモヴィチ (2016) の中で考察が行われている¹⁹⁾. この後項動詞「～こむ」が持つ主要な意味のひとつに「内部への移動」がある. 後項動詞「～だす」は「～こむ」と意味的に対極をなすものであり, その生産性の高さを考慮に入れた結果, 本稿における研究対象とした. また, 後項動詞「～でる」の生産性は決して高くないものの, 「～だす」と同様の意味を持っているため, 本稿では研究対象として加えた. なお, 「～でる」「～だす」の意味については, 複合動詞の区別に関して影山と同じ分類法を採用している姫野 (1999)²⁰⁾の研究を参考とした.

2.2. 後項動詞「～でる」「～だす」

語彙的複合動詞を構成する後項動詞「～でる」「～だす」の双方に共通する基本的な意味は方向性である²¹⁾. 姫野の考えによれば, この方向性は, 物理的な移動を伴うものとそうではないものの2つに大別される.

後項動詞が「～でる」の場合, 「外部, 前面, 表面への移動」と「表だった場への登場」という2つの意味が認められる²²⁾. 前者の意味の場合, 形成される複合動詞は, たとえ前項動詞が他動詞であっても自動詞となり, 一方, 後者の意味における複合動詞の自他の区別は前項動詞の自他と一致する²³⁾. さらに, 「外部, 前面, 表面への移動」に分類される複合動詞は, 外部への移動が前項動詞の意味に含まれるか否かによって2つのタイプに分類される. 前項動詞が外部への移動の意味を含む「溢れでる」「漏れでる」などのタイプでは, 後項動詞によって前項動詞 (本動詞) の意味が強調されているにすぎないため, 「～でる」を除いても意味の上ではほとんど変化がない²⁴⁾. 他方, 前項動詞に外部への移動の意味が含まれない「這いでる」「転がりでる」などのタイプでは, 後項動詞が移動の方法, 様相を示しているため, 前項と後項がそれぞれ修飾・被修飾の関係にある²⁵⁾.

また、どちらのタイプでも、同一の文脈で後項動詞「～だす」に置き換えられる場合がある²⁶⁾。「表だった場への登場」に分類される複合動詞の自他の区別は前項動詞のそれと一致し、自動詞の場合は主体の登場が、他動詞の場合は登場の目的が示されるため、必ずしも物理的な移動を伴わない²⁷⁾。

・語彙的複合動詞を構成する後項動詞「～でる」の意味（姫野 1999 による）

- 1) 外部, 前面, 表面への移動
 - i. 前項動詞が外部への移動の意味を含むもの
例. 「溢れでる」「漏れでる」「浮きでる」「にじみでる」など
 - ii. 前項動詞が外部への移動の意味を含まないもの
例. 「這いでる」「転がりでる」「飛びでる」「突きでる」など
- 2) 表だった場への登場
例. 「まかりでる」「のさばりでる」「訴えてる」「届けでる」など

後項動詞「～だす」によって構成される語彙的複合動詞では、「移動」と「顕在化」の2つの意味的傾向が見られる。「移動」の意味は、「～でる」の場合と同様に、「外部, 前面, 表面への移動」と「表だった場への出現」の2つに区別されるものの、前者の意味を持つ複合動詞の自他は前項動詞の自他と一致しない²⁸⁾。他方、「表だった場への出現」ならびに「顕在化」に属す複合動詞の前項はすべて他動詞から成り、複合動詞自体も他動詞として実現する²⁹⁾。「移動」のサブタイプとして設定されている「表だった場への出現」は、当事者の意思とは無関係に人を表だった場に出すことを表す。「移動」の意味的ヴァリエントと言うべき「顕在化」は、対象を外部や表面に出現させることによって人の目に触れさせることを意味し、前項動詞の意味特徴によって「顕現」「創出」「発見」という3つの意味に細分化することができる³⁰⁾。姫野の定義によれば、「顕現」は人が知覚できるようになることで既存の事物の存在が変化を伴って明らかになることを、「創出」は人の手によって無の状態から対象が生じることを、「発見」は求めていたものの存在が明らかになる

ことを意味する。

・語彙的複合動詞を構成する後項動詞「～だす」の意味（姫野 1999 による）

- 1) 移動
 - i. 外部, 前面, 表面への移動³¹⁾
例. 「溢れだす」「這いだす」「運びだす」「担ぎだす」「売いだす」など
 - ii. 表だった場への出現
例. 「召しだす」「突きだす」「駆りだす」など
- 2) 顕在化
 - i. 顕現: 例. 「暴き出す」「削り出す」「映し出す」など
 - ii. 創出: 例. 「考え出す」「染め出す」「ひねくり出す」など
 - iii. 発見: 例. 「見出す」「探り出す」「洗い出す」など

3. 後項動詞「～でる」「～だす」に対応するロシア語の動詞接頭辞

本章では、後項動詞「～でる」「～だす」を持つ語彙的複合動詞と意味的に対応するロシア語を調査し、どのようなロシア語訳が用いられるのかについて統計的分析を行う。そして訳語の中で接頭辞付加動詞に着目し、「～でる」「～だす」によって構成された語彙的複合動詞の訳語に接頭辞付加動詞が使用される場合、どのような接頭辞がどれほどの割合で用いられるのかを具体的な数値で示すことを目的とする。

本稿で分析の対象とした複合動詞のデータは、『複合動詞レキシコン』に収録されているもの、およびウェブ上に公開されている、『複合動詞レキシコン』の元データに収録されているものの一部を使用した。分析対象とした語彙的複合動詞の数は「～でる」が57語、「～だす」が137語である。元データの中にしか挙げられていない語彙的複合動詞のうち、使用頻度が高いと思われるものも分析対象に加えたため³²⁾、前述の語数は『複合動詞レキシコン』に収録されている複合動詞の数と一致していない³³⁾。

ロシア語の訳を考える際、各複合動詞の意味及

び使用例については『複合動詞レキシコン』内における記述、国語辞典³⁴⁾および日本語コーパス³⁵⁾によって確認を行った。接頭辞付加動詞単体による訳出が困難な場合は、副詞の併用、接頭辞付加動詞と分詞を含む2語以上の動詞を用いるなどして、ロシア語でも日本語と同等、あるいは近い意味が表わせるよう心掛けた。また、ひとつの複合動詞に対して複数のロシア語の動詞が訳語として想定される場合はその全てを訳語の候補とした。従って、あるひとつの複合動詞が複数の接頭辞付加動詞を訳語に持つ場合もある。

その後、接頭辞付加動詞が訳語に使用されている複合動詞の数を計算し、その数に基づいて各動詞接頭辞が使用される割合を百分率で表した。百分率の算出方法は、ある動詞接頭辞が訳語に使用されていた複合動詞の数を複合動詞全体の数で割り、それに100をかけたものである。なお割合の数値については、小数点以下第2位で四捨五入を行い、第一位までを表示している。

接頭辞付加動詞が訳語に使用された複合動詞の数を表で表すと〔図表1〕のようになる。〔図表1〕における列Aは、動詞接頭辞が訳語に使用されていた複合動詞の数を、列Bは複合動詞全体における割合(%)を示している。なお、動詞接頭辞は基本形だけを表示し、異形態は省略している³⁶⁾。また、列Bの数値をグラフで表すと〔図表2〕のようになる。数値は全て%による表示である。〔図表1〕および〔図表2〕では、複合動詞の訳語に一度も用いられることがなかった接頭辞(DE-, DIS-, NAD-, NEDO-, NIZ-, OBEZ-,

PRE-, VOZ-)は除いた。

どのような接頭辞付加動詞が複合動詞の訳語として使用されるのかを示すために、実際の例の一部を5%以上の数値を示したものに以下に引用する。

・後項動詞が「～でる」の場合

OT-:「こぎ出る」otčalivat', 「弾け出る」ot-skakivat'; PRED-:「届け出る」predstavljat', 「名乗り出る」predstavljat'sja; PRO-:「こぼれ出る」prolivat'sja, 「染み出る」prosačivat'sja / prostupat'; RAZ-:「溶け出る」rastvorjat'sja / rasplavljat'sja, 「伸び出る」rastjagivat'sja / rasširjat'sja; S-:「すり出る」soskal'zyvat', 「抜け出る」sbežat' (s+Gen.); U-:「逃れ出る」ubegat' / uchodit', 「おん出る」uchodit'; V-:「差し出る」vmešivat'sja, 「踏み出る」vstupat' (na+Acc.); VY-:「転がり出る」vykatit'sja / vyvalit'sja, 「逃げ出る」vybegat'; ZA-:「届け出る」zajavljat', 「申し出る」zajavljat' など。

・後項動詞が「～だす」の場合

IZ-:「作り出す」izgotavljat', 「選り出す」izbirat'; OT-:「送り出す」otpravljat', 「探し出す」otyskat'; PRI-:「導き出す」privodit' (k+Dat.), 「編み出す」přidumyvat'; PRO-:「おん出す」progonjat', 「嗅ぎ出す」pronjučivat'; RAZ-:「聞き出す」razuznat', 「尋ね出す」razyskat'; VY-:「叩き出す」vybivat', 「飛び出す」vyletet' など。

後項動詞「～でる」によって構成された語彙的複合動詞のうち、最も高い頻度で用いられていた

表1 接頭辞付加動詞が訳語に使用される語彙的複合動詞の数とその割合

ロシア語 動詞接頭辞	「～でる」		「～だす」		ロシア語 動詞接頭辞	「～でる」		「～だす」	
	A	B	A	B		A	B	A	B
DO-	1	1.8	1	0.7	PRI	2	3.5	13	9.4
IZ-	2	3.5	7	5.1	PRO	4	7	15	10.9
NA-	1	1.8	5	3.6	RAZ-	6	10.5	15	10.9
O-	0	0	3	2.2	S-	3	5.3	4	2.9
OB-	0	0	3	2.2	U-	4	7	6	4.3
OT-	3	5.3	22	15.9	V-	3	5.3	1	0.7
PERE-	1	1.8	4	2.9	VY-	33	57.9	95	68.8
PO-	4	7	4	2.9	VZ-	2	3.5	3	2.2
POD-	0	0	3	2.2	ZA-	4	7	6	4.3
PRED-	4	7	0	0					

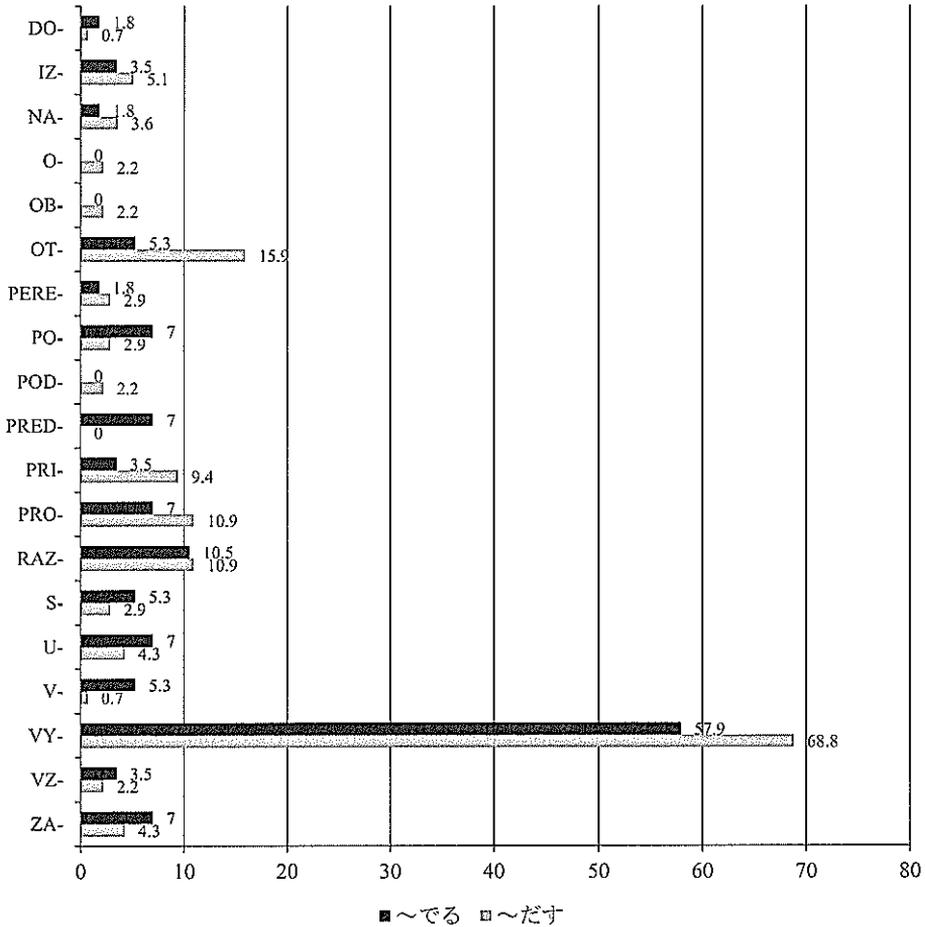


図1 接頭辞付加動詞を訳語に持つ語彙的複合動詞の割合

動詞接頭辞は VY-である。これに次いで RAZ-が 10% の数値を示し、これら以外の動詞接頭辞の数値はどれも 7% を下回っている。

後項動詞「〜だす」の場合を見ると、「〜でる」の場合と同様、VY-が最も高い割合で使用されている。VY-に次いで OT-が 15%、PRO-と RAZ-が 10%、PRI-が 9% の数値を示し、その他の動詞接頭辞は軒並み 5% 以下の割合でしか使用されない。

調査結果から明らかなように、語彙的複合動詞を構成する後項動詞「〜でる」「〜だす」双方に対応する代表的な動詞接頭辞は VY-である。また、後項動詞「〜だす」では VY-に次ぐ代表的な接頭辞として OT-が該当すると考えられる。

4. 後項動詞「〜でる」「〜だす」と動詞接頭辞 OT-, VY-との意味的な相関性

後項動詞「〜でる」によって構成された語彙的複合動詞の訳語に使用されうる動詞接頭辞のうち、VY-が 50% 以上、また「〜だす」では VY-が 68%、次いで OT-が 15% という比較的高い割合で用いられることが本稿第 3 章の調査結果により明らかになった。

ここで、これらの動詞接頭辞 VY-, OT-が「〜でる」「〜だす」の訳語として頻繁に使用される理由を、ロシア語学の分野における動詞接頭辞の用法および意味の定義を参照することによって明らかにしてみたい。本章では、ロシア語の動詞

接頭辞の意味を詳細に考察した Čerepanov (1975) の『現代ロシア語の動詞語形成』³⁷⁾における記述を参考にし、その中で定義されている動詞接頭辞 VY-, OT-の意味と、姫野 (1999) の考える「～でる」「～だす」の意味、すなわち「～でる」「～だす」の双方が持つ「移動」と「～だす」が持つ「顕在化」との間にどの程度の関連性があるのかを考察する。なお、Čerepanov (1975) は VY- に 18 種類の意味を、OT- には 20 種類の意味を与えている。紙幅の都合により、本稿では姫野 (1999) の「移動」と「顕在化」に該当する意味だけを引用する。

まず、接頭辞 VY- が持つ意味のうち、「移動」に該当するものを以下で紹介する³⁸⁾。以下の例文は、Čerepanov (1975) の中で挙げられていた接頭辞付加動詞のリストの一部に本稿筆者が加筆を行い、文あるいは句にしたものである。また、それぞれの意味に振られた番号は Čerepanov (1975) に従っている。

- 1) 内から外へ移動する。何らかの範囲を越える。例: Iz komnaty vyporchnula babočka. 「蝶が部屋から飛び立った」; Marija v slezjach vybežala iz kabineta vrača. 「マリアは診察室から泣きながら走り出した」
- 2) 内から外へ対象を移動させる。何らかの空間の範囲を越えさせる。例: vynesti musor na balkon 「ゴミをバルコニーに運び出す」; vysunut' golovu iz okna poedza 「車窓から頭を出す」
- 3) 対象を空間や環境などから遠ざける。例: vykurit' komarov iz palatki 「テントの中から蚊をいぶし出す」; vymachat' nazoilivuju mučhu iz detskoj komnaty 「子供部屋からうるさいハエを追い出す」
- 6) 何らかの環境、空間から対象を引き抜く。例: vygresti pyl' iz-pod krovati 「ベッドの下から埃を掻き出す」; Stroiteli vykopali klad. 「作業員たちは宝を掘り出した」

次に、OT- における「移動」に該当する意味として以下のものが挙げられる³⁹⁾。

- 1) 何かから遠ざかる。例: Lodka otčalila ot berega. 「ボートが岸から離れた」; Chromoj

otkovyljal nemnogo v storonu. 「足の不自由な人がびっこを引きながら離れた」

- 2) 何かから対象を遠ざける。例: otvesti re-bjonka v detskij sad 「子供を幼稚園へ連れて行く」; otodvinut' tarelku ot kraja stola 「テーブルのはしっこから皿を押しやる」
- 3) 別の対象からある対象を、あるいは対象の中からその一部を分ける。例: otkleit' marku ot konverta 「封筒から切手をはがす」; otkrepit' značok ot pidžaka 「背広からバッジをはがす」
- 4) 基幹動詞によって表されるプロセスが発展した結果、何かから分離する、剥がれる。例: Ot vetki otorvalsja poslednij listok. 「枝から最後の葉が落ちた」; Otkololas' čast' zuba. 「歯の一部が欠けた」
- 5) 動作主のものとなるように何かを手に入れる。横取りする、獲得する。例: otvoevat' bol'šuju territoriju 「広大な領土を勝ち取る」; otobrat' igrušku 「おもちゃを取り上げる」

「移動」に該当すると思われるこれら VY-, OT- の意味には物理的な「外部への移動」だけではなく、選別、獲得、所属場所の変更などの副次的な意味も含まれている。本稿第 3 章で明らかになった、「～でる」「～だす」の訳語として双方の接頭辞付加動詞が使用される例が多いという事実を考慮に入れれば、ロシア語の動詞接頭辞が持つ上記の意味を広義の「移動」としてみなすことが適当であると思われる。また、「移動」に関係するこうした意味が VY-, OT- の中で複数見られることから、双方の動詞接頭辞において「移動」が主な意味の一つであると考えられる。

後項動詞「～だす」に関して言えば、「移動」と並ぶ主要な意味である「顕在化」が存在する。姫野 (1999) が「顕在化」に属する複合動詞として挙げている 45 語のうち⁴⁰⁾、VY- 付加動詞で訳すことができるものは 48%、RAZ-, PRI-, IZ- 付加動詞はそれぞれ 15%、O- ならびに OT- 付加動詞は 13% の割合で使用されている (VY- 付加動詞の一例、vyskazyvat' 「言いだす」、vystrogat' 「削りだす」、vytkat' 「織りだす」、vydumyvat'

「ひねくりだす」, vyvedyvat' 「探りだす」, vyjasnjat' 「洗いだす」など)。このことから分かるように、「顕在化」の意味においても VY- が代表的な動詞接頭辞として該当することが分かる。

姫野 (1999) の中で「顕在化」は「顕現」「創出」「発見」という3つの意味に細分化されている。これらの3つの意味と、これらの意味を持つ複合動詞の訳語として使用される接頭辞付加動詞の代表的な接頭辞として VY- の意味を比較してみたい。まず、「顕現」に該当すると思われるのは、前述の「移動」の意味の考察で紹介した接頭辞 VY- が持つ1番、2番、6番及び以下の3種類である¹¹⁾。

- 7) 複数の対象の中からひとつを選抜する。
例: vyiskat' nužnuju vešč' v magazine 「店で必要なものを探し出す」; vysmotret' v tolpe znakomogo 「人だかりの中を知り合いを見つける」
- 9) 対象を作る、生産する。例: vyvit' vručnuju dlinnuju verëvku 「長い縄を手でなう」; Papa vypilil ramku dlja novoj fotografii. 「お父さんは新しい写真用の額縁を鋸でこしらえた」
- 14) 何かを表す、表現する。例: vyboltat' sekret 「秘密を漏らす」; On vyskazal želanie i ono tut že bylo ispolneno. 「彼が要望を述べるとすぐになかった」

上記の VY- の意味のうち、9番、14番の意味は「創出」にも該当する。

また、「発見」には7番および11番の意味のみが該当する。

- 11) 対象を入手する、獲得する、得る。例: Sos-ed vyigral v lotereju bol'šuju summu. 「お隣さんは宝くじで大金を手に入れた」; vyprosit' u roditel'ej konfetu 「親にねだってキャンディをもらう」

「顕在化」に属する動詞のうち、その48%が訳語として VY- 付加動詞を持つことに関しては、接頭辞 VY- が上記のように幅広い意味をカバーしていることが理由として考えられる。

む す び

本稿では『複合動詞レキシコン』を基にして、後項動詞「～でる」「～だす」を持つ語彙的複合動詞194語をロシア語に訳出し、接頭辞付加動詞に着目することで訳語に使用される傾向にある動詞接頭辞を特定した。結果として、後項動詞「～でる」には VY- が、「～だす」には VY-, OT- を用いた接頭辞付加動詞が用いられる傾向にあることが判明したが、これら以外の動詞接頭辞が使用されるケースについては紙幅の関係により稿を改めて述べたい。

また、語彙的複合動詞を構成する他の後項動詞で同様の考察を行うとどのような結果が得られるのか調査する必要がある。これに加えて、日本語の後項動詞およびロシア語の動詞接頭辞の意味、機能に関する最新の先行研究を扱うことによって、現代の理論に裏付けられた両者の意味や機能を本研究の中に取り入れることも考えなければならない。

こうした研究を続けるとともに、ロシア語を母語とする外国人が複合動詞を学習する際に学習効率を高められる方法を今後も模索したい。

注

- 1) 例えば、Golovnin (1986) の文法書では、動詞+動詞型の複合動詞の例は挙げられているものの、複合動詞の意味的な分類や構造に関しては全く説明されていない。また、Nečeva (1994) による中級レベルの教科書では「～上げる」「～過ぎる」を用いた複合動詞の例と用法のみが記されている。一方で、同じく中級レベルの教科書である Golovin (1997) では複合動詞に関して一切触れられていない。Golovnin I. V. Grammatika sovremennogo japonskogo jazyka. Moskva, 1986. Golovnin I. V. Učebnik japonskogo jazyka. Kurs dlja prodolžajuščich. Moskva, 1997. Nečeva L. T. Učebnik japonskogo jazyka dlja prodolžajuščich. Moskva, 1994.
- 2) 亀井孝, 河野六郎, 千野栄一編著『言語学大辞典』第6巻 述語編 三省堂, 1995年, p. 1139.
- 3) 国立国語研究所『複合動詞レキシコン』<http://vvllexicon.ninjal.ac.jp> (2016年3月25日閲覧), 2015年。なお、元データは同サイトでダウンロードすることができる。
- 4) 本稿におけるロシア語の翻字は国際標準規格

- ISO/R 9: 1968 に準拠している。
- 5) 接頭辞を持たない派生前のロシア語動詞を指す用語として「基幹動詞」を用いる。なお「基幹動詞」の名称は金子(2003)に倣った。金子百合子「動詞接頭辞3 A-が表わす開始意味について」『Slavistika: 東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室年報』18号 pp. 214-232。東京大学大学院人文社会系研究科スラヴ語スラヴ文学研究室, 2003年。
- 6) ロシア語辞書を見ても、動詞接頭辞接頭辞の数は Dal' (1955) 18種類, Ožegov (1953) 27種類, Ožegov (1960) 26種類, Ožegov (1982) 26種類, Ožegov, Švedova (2003) 25種類であった。これらの辞書の中で挙げられている全ての接頭辞から重複をしたものを除いて数え上げると、v-, vz-, voz-, vy-, de-, dis-, do-, za-, iz-, na-, nad-, nedo-, niz-, o-, ob-, obez-, ot-, pere-, pre-, pred-, po-, pod-, pri-, pro-, raz-, s-, u-の計27種類となる。Dal' V. I. Tolkovyj slovar' živogo velikoruskogo jazyka (I-IV tt.). M oskva, 1955. Ožegov S. I. Slovar' russkogo jazyka (3-e izdanie). M oskva, 1953. Ožegov S. I. Slovar' russkogo jazyka (4-e izdanie). M oskva, 1960. Ožegov S. I. Slovar' russkogo jazyka (14-e izdanie). M oskva, 1982. Ožegov S. I., Švedova N. Ju. olkovyj slovar' russkogo jazyka (4-e izdanie). M oskva, 2003.
- 7) ロシア語をはじめとするスラヴ諸語の動詞には「体」のカテゴリーが存在し、完了体動詞と不完了体動詞という2つの動詞の形式が存在する。このため、語彙的に共通点を持つ同一の動詞は完了体と不完了体という体のペアを形成する。完了体動詞が表す動作はある種の臨界点によって制限されており、臨界点に達した動作は終了しないし中断する。一方、不完了体動詞の動作はそのような限界を持たず、実行プロセスにおける動作あるいは臨界点への到達を目指す動作が表される。Ėnciklopedičeskij slovar'-spravočnik lingvističeskich terminov i ponjatij. Russkij jazyk : v 2 t. / Pod obščej red. A. N. Tichonova, R. I. Chašimova, Vol. 1. Moskva, 2008. p. 581, 686.
- 8) Ibid., Vol. 1. p. 691. Achmanova O. S. Slovar' lingvističeskich terminov. Moskva, 1966. p. 352.
- 9) 例えば接頭辞が付された完了体動詞 podpisat' へさらに接尾辞-yva-を加えて形成された podpisivat' は不完了体となる。二次的な不完了体のこうした形成方法は非常に生産的であり、他の接頭辞付加動詞にも及ぶ(例. vypisyvat', dopisyvat', zapisyvat', ispisivat', nadpisivat', raspisyvat' など)。
- 10) 長嶋善郎「複合動詞の構造」『日本語講座4 日本語の語彙と表現』pp. 63-104. 大修館書店, 1976年。
- 11) 神崎享子「国立国語研究所オンラインデータベース「複合動詞レキシコン」」『複合動詞研究の最先端——謎の解明に向けて』pp. 437-446. ひつじ書房, 2013年, p. 437. なお、『複合動詞レキシコン』における複合動詞の見だし語数は2700語超である(同書, p. 438)。
- 12) 影山太郎「語彙的複合動詞の新体系——その理論的・応用的意味合い——」『複合動詞研究の最先端——謎の解明に向けて』pp. 3-46. ひつじ書房, 2013年, p. 12. 神崎, 前掲書, p. 438.
- 13) 影山太郎『文法と語形成』ひつじ書房, 1993年, p. 78.
- 14) 同書, p. 96.
- 15) これらの動詞接頭辞は動作様態(ロシア語 sposoby dejstvija, ドイツ語 Aktionsart)の意味的カテゴリーのひとつである「始動の動作様態」nachinatel'nyj sposob dejstvija に分類される。Ėnciklopedičeskij slovar'-spravočnik lingvističeskich terminov i ponjatij. Russkij jazyk : v 2 t. / Pod obščej red. A. N. Tichonova, R. I. Chašimova, Vol. 2. Moskva, 2008. p. 31.
- 16) 動作様態の概念では、動詞接頭辞 OT-は「終止の動作様態」finitivnyj sposob dejstvija に分類される。Ibid., Vol. 2. p. 31.
- 17) 影山, 前掲書, p. 147.
- 18) 同書, p. 78.
- 19) アブラギモヴィチ・ユーリヤ「日本語の複合動詞における後項動詞とロシア語の動詞接頭辞との意味的対応について——語彙的複合動詞を構成する「～こむ」の場合——」『比較文化研究』121号, 比較文化学会, 2016年4月刊行予定。
- 20) 姫野昌子『複合動詞の構造と意味用法』ひつじ書房, 1999年。
- 21) 同書, p. 83.
- 22) 同書, p. 84.
- 23) 同書, p. 84.
- 24) 同書, p. 86.
- 25) 同書, p. 86.
- 26) 同書, p. 86. 後項動詞に「～でる」あるいは「～だす」が適用される条件について、影山(2002)は前項動詞が非能格自動詞(動作主の自主的な動き)の場合に「～でる」が、前項動詞が非対格自動詞(動作主の意図がない動き)の場合に「～だす」が用いられるとの説明を与えている。影山太郎「非対格構造の他動詞——意味と統語のインターフェイス」, 伊藤たかね編『文法理論: レキシコンと統語』pp. 119-145. 東京大学出版会, 2002年, p. 136.
- 27) 姫野, 前掲書, p. 87.
- 28) 同書, p. 88.
- 29) 同書, p. 93.
- 30) 同書, p. 93.
- 31) 「～だす」によって構成された複合動詞が自動詞の場合、外部への移動の意味の有無にかかわらず、「～でる」による交替が可能な場合が多い(同書, p. 89)。
- 32) 元データにしか収録されていない語彙的複合動詞のうち、本稿の分析対象に加えた「～でる」複合動詞は「抜きでる」「伸びでる」「生えでる」「弾けでる」「踏みでる」「濡れでる」, 「～だす」

複合動詞は「請けだす」「撃ちだす」「書きだす」「嗅ぎだす」「汲みだす」「紡ぎだす」である。

- 33) 『複合動詞レキシコン』に収録されている語彙的複合動詞のうち後項動詞「～でる」を持つものは51語、「～だす」を持つものは132語である。なお、「～だす」複合動詞132語のうち「萌えだす」は始動の意味を持つことから統語的複合動詞とみなし、本稿の調査対象からは除外した。
- 34) 松村明監修『大辞泉第二版』小学館、2012年。北原保雄編著『明鏡国語辞典第二版』大修館書店2010年。
- 35) 国立国語研究所, Lago 言語研究所『NINJAL-LWP for BCCWJ』<http://nlb.ninjal.ac.jp/> (2016年3月25日閲覧), 2015年。
- 36) ロシア語の動詞接頭辞には、後続する音の種類によって異形態を持つものがある。例えば動詞接頭辞 IZ-は、一定の子音結合の前では母音が挿入されて IZO- (izognut' 「折り曲げる」, izorvat' 「引き裂く」) となり、無声子音の前では逆行同化によって IS- (iskupit' 「殴う」, ispravit' 「直す」) となる。
- 37) Čerepanov M. V. Glagol'noe slovoobrazovanie v sovremennom russkom jazyke. Saratov, 1975.
- 38) Ibid., pp. 15-21.
- 39) Ibid., pp. 72-75.
- 40) 姫野, 前掲書, pp. 93-95.
- 41) Čerepanov, op. cit., pp. 21-27.

The Semantic Correspondence between Second Verbs of Japanese Compound Verbs and Russian Verb Prefixes —— Case of “-DERU/-DASU” —— second part of lexical compound verbs ——

Yuliya ABRAHIMOVICH

Graduate School of Human and Environmental Studies,
Kyoto University, Kyoto 606-8501 Japan

Summary Japanese language learners often find it effortful to comprehend and use Japanese compound verbs. For Russian native speakers who are not familiar with this term due to its absence in their own language, “compound verbs” are being even more challenging. This research is meant to create a comprehensive guide into practical use of Japanese compound verbs for native speakers of the Russian language.

In this article the author puts the focus on second verbs “-DERU/-DASU” which form a number of Japanese compound verbs. Using the database of The National Institute for Japanese Language and Linguistics (NINJAL) named “Compound Verb Lexicon” as a reference, the author explores Japanese compound verbs formed with the help of “-DERU/-DASU” and Russian verbs with prefixes used for translation. As a result, the semantic correspondence between second verbs of Japanese compound verbs “-DERU/-DASU” and Russian verb prefixes is confirmed and will be introduced in the following article.